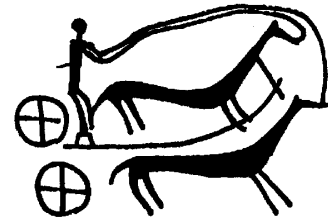


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 30



| | |
|--|----|
| 全学教育委員会開催される | 3 |
| 全学教育の科目責任者からのひとこと | |
| 「体育学」「言語と文学」「人間・環境と科学」「心理学実験」 | 4 |
| 一般教育演習の開講数が定着 | 6 |
| 新任教官研修会開催される | 7 |
| シンポジウム「大学における教育方法の開発とポートフォリオ 方式による学習評価」 | 10 |
| 北海道大学放送講座（TV）の概要決まる | 11 |

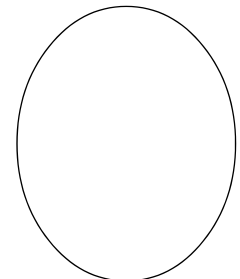
巻頭言 FOREWORD

キャンパス・コアゾーンとしての高機能センター

センター長補佐（工学研究科教授） 岸浪 建史

平成11年4月より高等教育機能開発総合センター（以下センターと呼ぶ）のセンター長補佐をおおせつかってから1年2ヶ月が経過した。センターの組織は全学教育部と2研究部（現在は3研究部）から構成されており、私は全学教育部における予算施設事項を主に担当している。工学部以外の組織を知らないこともあって、学務部教務課の助けを借りながら半年間はセンターの組織・機能および検討すべき課題に関する勉強であった。約2,000コマにおよぶ開講講義数、5,000人を超える学生数、53室におよぶ

講義室、大人数の学生実験を可能とする実験室、複雑で巨大なカリキュラム等その規模の大きさばかりでなく、その管理運営が少人数の共通教育掛を中心に全学に分散する大勢の教官の協力により実施されている姿は本当に驚きであった。また平成7年度に教養部廃止からセンターへの移行が実施されたにもかかわらず、



随所に旧制度の痕跡が残っていることも、初めて知るところとなった。昭和30年代に建てられた庁舎の改修工事が平成11年度に開始されたことは旧教養部から新しいセンターへの実質的移行および飛躍の節目となることは誰の目にも明らかであった。この節目にセンターの業務に参画できたことは大変幸運であったと思う。以下、センターに期待する事柄を思いつくままにのべることとする。

北海道大学は大都市の中に豊かな自然にめぐまれた広大なキャンパスを持ち、そこにほとんどの学部が集結する全国でも最も教育研究環境に恵まれた大学の一つである。このキャンパスの中心に位置するセンターにおいて日本の将来を担う5,000人もの若い学生が勉学している事を想像するだけでも、北大で最もエキサイティングな空間であり、キャンパス・コアゾーンと言っても過言ではない。この空間において本学の誇るべき建学精神（開拓者精神、国際性、全人教育）を継承し、実践する教育がなされなければならない。まさに平成12年4月17日に体育館で実施された宇宙飛行士毛利衛氏の特別講演はこの主旨にそう教育実践そのものであったといえよう。事実、大学院学生を含む多くの学生が参加した。また平成12年6月に開催された大学祭のいくつかの企画はセンターを中心として開催され、多くの他大生・市民の参加を誘い学生自身の企画運営と統制により大過なく行事を終了させた学生の力量は本学の教育理念と目標につながるものであると感じた。同時に、センターがまさにキャンパス・コアゾーン

としての役目を果たしつつあることを実感した。

この延長線上に我々教官一人一人が北大の教育理念と目標のもとに全学教育に参画することが、単に専門知識の量的蓄積を誇るのではなく、広い視野に立ち、優れた判断力と高い見識を備えた人材の育成につながると確信している。

平成11年度から、センター機能の充実と整備を目指し、講義室・基礎実験室の大型改修、情報処理教育環境の整備、隣接する情報教育館の開設等の実施により、物理的教育環境は整備されつつある。また学生の自学自習を可能とする学習環境の整備としてセンター庁舎、情報教育館、図書館北分館を廊下でつなぎ利便性の向上が計られた。しかし残された課題としては大講義室および小講義室の整備、マルチメディア教育環境の整備、全学教育スタッフのための教育支援機能等の充実がある。

これらの環境整備とともに、大学院共通教育をも視野に入れた、本学の誇るべき建学精神を継承し、実践する未来志向型教育の企画・調整・運営機能、そのための実施支援機能の充実等、センターの果たすべき役割はますます重要となりつつあると確信する。全学部が空間的・時間的制約をうけることなく学生教育に寄与できるキャンパス環境は建学の精神とともに北大の優れた特徴であり、広くアピールすべきものである。この北大がもつ特徴を生かしながら、学部には無い若さと、無限の可能性を感じさせるセンターにささやかながら寄与できることは大学人として大きな喜びである。

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会開催される

4月28日(金)に第31回(平成12年度第1回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。平成12年度の第一回目の委員会であるために、議事にさきだって、委員長である前出センター長より交代した委員の紹介があり、つづいて審議に移りました。

議題1. 全学教育科目の見直しに係る科目設定について

議題2. 平成12年度全学教育委員会の検討事項(案)について

議題3. 全学教育委員会小委員会委員等の交代について

報告事項1. 一般教育演習の履修調整について

議題1では、2月2日の教務委員会において、全学教育科目見直しの基本的考え方が了承されたことをふまえて、全学教育委員会小委員会で作成された全学教育科目(案)が諮られました。山口小委員会委員長から、配布資料に基づいて説明があり、審議の結果了承されましたので、原案を各学部にもち帰って検討してもらうことになりました。各部局の意見は5月31日(水)までに文書で教務課共通教育掛へ申し出てもらうこととなります。

議題2では、委員長から以下の6項目にわたる検討事項の原案が諮られました。山口小委員会委員長から説明があり、審議の結果了承されました。

1. コアカリキュラムをもとにした全学教育科目の見直し

- * 全学教育科目の科目設定

- * 履修調整、履修登録上限の検討

- * 学部との連携

2. 全学教育運営費の運用

- * 予算/施設委員会との連携

3. 全学教育における施設/設備の充実

- * 視聴覚機材(液晶ビデオプロジェクター等)の整備

- * 講義室の教壇、教卓等の整備

- * 予算/施設委員会との連携

4. ティーチングアシスタント運用の見直し

- * 対象範囲の拡大

- * 部局から拠出する経費の取り扱い

5. 全学教育支援体制の構築

- * 科目責任者会議の運営

6. 全学点検評価報告書(学業成績評価関係)に盛り込まれた課題について

- * 成績評価基準の明確化/公開の措置

- * 学業成績評価の意味についての学生への周知徹底

議題3では、言語文化部選出の委員および各種委員会委員の交代が委員長より諮られました。

報告事項1では、今回初めてのケースとして行われた一般教育演習の履修調整の結果について、山口小委員会委員長より、配布資料に基づいて報告がありました。今回の履修調整により、昨年度の50名以上の7科目、30名以上の9科目、26名以上の13科目という多人数クラスがなくなり、21~25名の38科目、11~20名の38科目、10名までの12科目という分布となりました。

*** 全学教育の科目責任者からのひとこと ***

運動を通して健康な社会づくりの担い手に

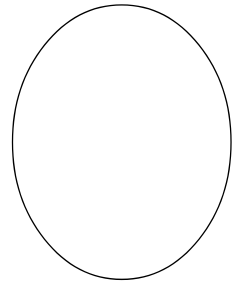
「体育学」企画責任者 大学院教育学研究科教授 須田 力

かつての教養部の時代には大学院に進学する割合は少なかったため、大部分の学生の在籍期間は4年間で正課体育は1年半の履修期間でした。学内のあちこちに空き地があって休講の時間などにスポーツに興じる光景が見られました。しかし、「大学院重点化」の現在、多くの学生諸君が修士課程、博士課程とキャンパスで過ごす期間が延長したにもかかわらず正課体育で運動できる期間はたったの1年間です。大学院で寝食を忘れて研究に打ち込む生活の中では、運動は2の次、3の次にされてしまう生活習慣が定着してしまいがちです。

私たちが本学の学部3年生、大学院修士1年生に対して昨年実施した調査の結果によると、健康維持のために必要な運動所要量（心拍数130拍/分で、週当たり180分）を充足している割合は、学部生で男子24%、女子6%、大学院生では男子19%、女子は0%に過ぎません。大部分の学生が長期間にわたって冠

動脈心疾患の危険因子のひとつである運動不足 (inactivity) を抱えた不健康な生活を送っているのが現実です。

運動は、健康保持のために必須であるばかりではありません。知育偏重の風潮の中で近年身体活動を通しての認識の重要性、運動を通してのコミュニケーションや自己表現の独自の役割などが再認識されております。限られた時間の中で一見憂さ晴らしに見える正課体育も、このような資質を高める上で全学教育の中でかけがえのない役割を果たしていることを理解して下さい。その資質が全学教育を通して高められた教養と一体化して、自分の健康保持だけでなく将来健康な社会をつくっていくパワーとして昇華されていくことも期待しております。



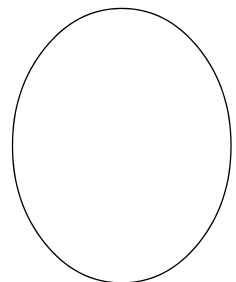
論文指導の行方

「言語と文学」企画責任者 文学研究科助教授 瀬名波 栄潤

アメリカの大学では「英語」が1年生向けの必修科目となっている。高校での成績が優秀で履修免除になった学生を除き全員が受講し、アカデミアの人間としてふさわしい表現力を身につけるための訓練を受ける。

前期は一般作文指導だ。自分の意見を思いのままではなく、読み手が理解しやすいように客観的且つ帰納法的に展開する。随筆調の演繹的な私的論文

は、ここでは不可だ。後期では文学作品を読み、批評論文を書くことになる。文字を媒体とした芸術作品を参考資料と共に分析し、その結果を文字で科学的に表現する。そして、学年末には統一の修了試験を受ける。落第すると進級



できず、1年生にとって最初の鬼門となる。

「英語」の授業で養われる理論展開の技術は、大学で学ぶ者の最低限のルールだ。これから様々な分野に進もうとする学生にとっては、自己を明確に表現するための必要不可欠な武器である。

日本の大学では日本人のための必修「日本語」はないようだ。が、「自己流ではなく、大学生らしい文章を書きたい」という学生からの要望は多い。本

学では、全学教育科目の中の「論文指導講義」がそれに対応している。

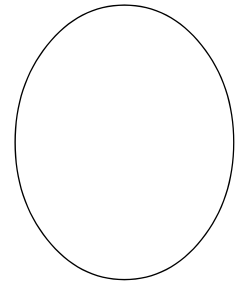
論文指導は大学が新入生に与える最初の知的財産だ。それが基盤となり、知識と人間性は高められ、社会的貢献が可能になる。平成12年度、文学部及び言語文化部の教官達は53種の「言語と文学」を提供している。そのうち26講義が論文指導である。

地球環境と人間との関わり

「人間・環境と科学」企画責任者 大学院理学研究科教授 片倉 晴雄

人間を取り巻く自然環境は、過去も現在も刻々と変わっています。しかし、その変化を引き起こす要因は、過去と現在では随分違うものになってしまいました。それは、我々人類が急増し、地球上の資源を消費し、自分たちが住みよように周辺の環境を改変し続けてきたことと関係があります。特に最近の数十年の急速な地球環境の悪化は、人口の膨張と科学技術の発達の結果である可能性が高く、いわば人間の活動の負の遺産と言うことができます。目先の生活の快適さ・便利さを追求した結果が長期的には人間自身の将来をくらくしてしまつたとすれば、それは人間にとって皮肉以上の意味合いがあり

ます。今後、人間が地球上の資源を有効に利用しつつ生きながらえて行くためには、人間が環境に与えた様々な影響を理解し、適切な対応策を講じなければなりません。「人間・環境と科学」では、いくつかの側面から地球環境と人間との関わりを扱います。この講義が、環境問題に関する理解を深め、その方策について学生諸君と共に考える場となることを期待しています。



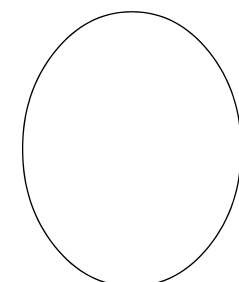
実験室が移転しました

「心理学実験」企画責任者 文学部助教授 田山 忠行

平成12年5月に実験室の改修と移転が終了し、新しく「心理学実験」がスタートしました。以前は実験室がセンター東側2階の一角にあり、やや喧騒の中で実験を実施していた感がありました。しかし5月からは、センター北西1階に移転した結果、落ち着いた雰囲気の中で実験ができるようになりました。

た。前期は、医学部生向けの実験が既に実施されており、後期は他の全学部の学生向けに開講される予定です。

講義の方もそうですが、「心理学実験」は、高校まで



の授業になかった新しい科目であるせいか、新入生の好奇心を大いにかき立てるようです。朝早くの2コマ連続の選択科目であるにもかかわらず、後期のみで毎年150名程度の履修者をかかえています。この科目は、現在、文学部のスタッフ9名、非常勤講師1名、TA4名が担当しています。実験内容は、感覚・知覚・記憶・思考・言語等の基礎的な実験から、社会心理や心理検査等の応用的な実験・検査まで様々です。

心理学は、人間の精神活動や行動の諸相、その背後の仕組みを科学的に究明する学問です。その目的を達成しようと、これまで様々な実験法、検査法、調査法が開発され、それらは心理学の発展に重要な役割りを果たしてきました。したがって、心理学がどんな学問なのかをよく知りたいという人には、「心理学実験」に参加して、実際に実験を行ってみること（身をもって体験されること）をお勧めする次第です。

一般教育演習の開講数が定着

本年度1学期の総合講義、一般教育演習、論文指導の履修状況は表1のようになりました。いずれの開講数も昨年を越える高い値を示しており、だんだん定着してきたことがうかがえます。1学期と2学

期の開講数の差が大きいことが気になりますが、このままの開講数が続くことが期待されます。

表1. 総合講義、一般教育演習および論文指導の開講数と平均履修者数

| | 平成10年度 | | 平成11年度 | | 平成12年度 | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|-----|
| | 1学期 | 2学期 | 1学期 | 2学期 | 1学期 | 2学期 |
| 総合講義 | 24 (170.0) | 19 (164.6) | 29 (164.6) | 13 (178.6) | 26 (177.3) | 13 |
| 一般教育演習 | 77 (31.6) | 42 (18.8) | 86 (25.0) | 39 (20.9) | 88 (19.1) | 51 |
| 論文指導 | | | | | | |
| 思想と心理 | 2 (117.5) | 5 (22.8) | 4 (23.3) | 4 (20.0) | 2 (40.5) | 5 |
| 歴史と文化 | 4 (36.5) | 6 (11.2) | 5 (52.0) | 5 (11.8) | 3 (31.7) | 7 |
| 言語と文学 | 11 (31.9) | 10 (39.4) | 10 (42.0) | 13 (32.8) | 10 (34.6) | 16 |
| 社会基礎構造 | 4 (65.0) | 5 (16.8) | 2 (48.0) | 4 (40.5) | 2 (159.0) | 4 |
| 社会関係と社会行動 | 10 (33.8) | 3 (35.0) | 9 (39.1) | 4 (35.3) | 10 (31.7) | 4 |
| 法と制度 | 3 (34.3) | 3 (10.7) | 4 (22.0) | 2 (14.5) | 4 (19.5) | 2 |
| 計 | 34 (42.1) | 32 (24.9) | 34 (38.5) | 32 (28.1) | 31 (39.9) | 38 |

(カッコ内は平均履修者数)

新任教官研修会開催される

本年度の新任教官研修会は、去る6月1日、高等教育開発研究部の主催で、情報教育館3階のスタジオ型多目的中講義室で行われました。この1年間の新任教員81名が参加し、午後のグループ討論にも30名の先生が参加しました。特に、午後のグループ別討論とその発表では、参加者自身がそれぞれのテーマについて議論し、発表しました。参加者の感想については次の記事をご覧ください。なお、この研修会の詳細については、次号の高等教育ジャーナルで報告する予定です。

プログラム

午前

北海道大学とはどのような大学か？

総長 丹保 憲仁

セクシュアル・ハラスメント等について

副学長・高等教育機能開発総合センター長

前出 吉光

国家公務員の服務及び倫理について

総務部長 早川 明彦

学生評価と成績評価

医学研究科教授 阿部 和厚

午後

成績評価をめぐって 討論と発表

以下の5テーマについてまとめて発表

- 1) 複数の教官が担当する同じ科目で成績のバラツキがある。
何が問題か？どうしたらよいか？（機関としての対応）
- 2) ある教官が45%不合格と評価し、現在の学生はできないという。
何が問題か？どうしたらよいか？
- 3) 小論文の客観評価：評価基準と評点化
何を評価するためか？どのように評価するか？
- 4) 学生参加型授業（学生中心授業）での評価
何を評価したらよいか？どのように評価するか？
- 5) 知識、技能以外の付加価値、資質の開発
どんな付加価値か？どのように評価するか？

< 新任教官研修に参加して >

教官としての心構え

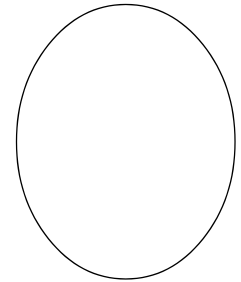
歯学研究科助手 奥山 克史

先日研修会に参加しましたが、改めて教官としての心構えのようなものを感じ取った気がします。

午前中の講演に引き続き、午後からは成績評価についてのグループ研修ということで、私は「小論文における成績評価をどのようにするか」といった感じのタイトルについてディスカッションを行ないました。今まであまり考えたことのない内容でしたので、はじめはいったいどういった結論が導き出されるものか、不安に思っていました。しかし実際にディスカッションを行っていくと、周りのみなさんの活発な発言によって、うまくまとめあげることができ

ました。そこで発表する私が、その内容をきちんと表現できれば文句なしだったのですが……。なかなか発表というのはうまくいかないものです。

それでも、学生に対する成績評価というものをこの機会にじっくりと考えることができ、大変有意義な時間を過ごしたように思います。今後はディスカッションの結果を生かしていきたいと思います。



< 新任教官研修に参加して >

新鮮さとともに難しさ

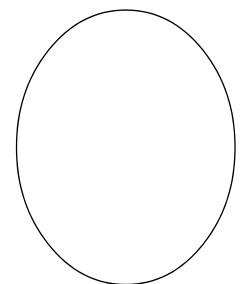
大学院工学研究科助教授 土橋 宜典

本年度より北海道大学に採用して頂いた私は、6月1日に開催された新任教官研修会に参加させて頂いた。興味深かったのは午後から行なわれた小グループに分かれての討論と発表だった。ここでは、私のグループで討論した内容についてまとめさせて頂きたい。

私のグループでは、大学教育の過程において、技術や知識以外に身に付けるべきものはなにか、また、それを伸ばすにはどうすればよいか、といったことを題材に討論を進めることとなった。それに対し、「創造性」、「社会性」、「柔軟性」などの意見が出されたが、特に、「先見性」はある程度の知識や経験・技術がなければ身につかないものであり、重視すべき項目であると考えた。そして、その開発方法については、以下の結論を得た。まず、何らかの

テーマを学生に与え、それについて、学生自身で考えた結論を発表させる。例えば、「次世代の携帯電話に必要な機能はなにか」などである。そして、その採点方法は、学生による投票を行ない、その得票数とする。「先見性」のようなあいまいなものの採点は教員でも難しいと思われるため、この方法が最もフェアであると考えた。

最後に、私は、今回初めて教育をするための講義を受けた。そして、新鮮さを感じるとともに、教育とは実に難しいものだと考えさせられた次第である。



< 新任教官研修に参加して >

レベルの高さに敬服

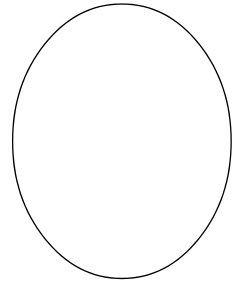
大学院法学研究科教授 北見 良嗣

私は、昨年7月日本銀行から約2年間の予定で赴任した社会人教授です。既に昨年度後期には、学部生（3，4年生）と大学院生のための演習を開講しましたが、本年度前期は、同様の演習に加えて、1年生向けの全学教育科目「法と金融制度」を担当しています。今回標題研修に参加し、研究機関であると同時に教育機関である大学のあるべき姿について、当大学がどのような模索と努力を重ねてきたかを改めて理解することが出来ました。また実務界から大学へ飛び込んだ者にとって若干の頭の整理が出来たようにも思っています。

カリキュラムの中でも、最後のグループ討論は、与えられた課題について限られた時間内に討論をまとめたうえで発表資料（OHP）を作成し、発表を行うというものであり、集中力・チームワーク等を要求されました。こういった進め方は、実務の仕事にお

いては最近割合多く用いられますが、そうした手法の採用が大学でも実践されるようになってきているのに若干の驚きを感じた次第です。それとともに、参加されている先生方がそれぞれの確に与えられた役割を果たされるのを見て、改めてレベルの高さに敬服致しました。

今回の研修に参加しての率直な感想は以上のとおりですが、最後に、研修を企画実践された関係者の方々に感謝の意を表すとともに、今後も、新任研修のアフターケアとして、経験又は在籍年数毎の研修の実施も検討頂きたいと存じます(既に、実践されているのかもしれませんが)。



シンポジウム 「大学における教育方法の開発と ポートフォリオ方式による学習評価」

最近の大学教育改革の中で、学生の個性や創造性、あるいは問題解決能力を育てる教育方法の開発が重視され、さまざまな実践が海外においても、国内的にもすすんでいます。また教育評価についても、学習の到達レベルだけでなく学習者自身の「学習課題」を考えさせ、ライフロングラーナーズとしての「学ぶ力」を育てる視点から、試験やレポートに加えて、その科目に関わるさまざまな活動の総体を学習者自身が提出する「ポートフォリオ」の導入が始まっています。すでにアメリカでは大学や高校等の関係者による「全米ポートフォリオ学会」が結成され、ポートフォリオ方式の活用による教育改革についての議論が始まっています。

こうした内外の動向を踏まえ、本学における教育改革の一層の進展に寄与するために、高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部および生涯学習計画研究部の両部において、「大学における教育方法の開発とポートフォリオ方式による学習評価」というテーマのシンポジウムを企画開催することになりました。

ご多忙な日々とは存じますが、本学の多数の教職員のご参加を希望いたします。

記

日時：平成12年7月17日(月)

午後2時から5時まで

場所：北海道大学情報教育館3階

スタジオ型多目的中講義室

シンポジウム報告テーマおよび報告者：

「京都大学における教育改善の試みの成果と課題
公開実験授業及び授業観察プロジェクトを手がかりに」

京都大学高等教育教授システム開発センター
助教授 石村雅雄氏

「ライフロングラーナーズを育てる大学教育と
ポートフォリオの可能性」

同志社大学文学部 助教授 山田礼子氏
(生涯学習計画研究部研究員)

問い合わせ先：

高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部
もしくは生涯学習計画研究部

E-mail syogai@high.hokudai.ac.jp

平成12年度北海道大学放送講座（TV） の概要決まる

平成12年度の北海道大学放送講座の概要が決まりました。総長裁量経費「新しい<環境>研究とメディア教育開発 北海道大学教育改革実践プロジェクト」（世話人会代表 生涯学習計画研究部長 小出達夫）の3年次計画が世話人会で決まり、センター運営委員会に報告されました。

市川和彦地球環境科学研究科教授を主任講師とするこの企画は、プロジェクトに参加する学内教官とHBC（北海道放送）とが協力して、「環境と水」をテーマに平成11年度と12年度の2年間にわたって、放送講座を製作し、道民に本学の先端的な研究をわかりやすい形で提供するものです。11年度は1.2%の視聴率で（約6万人）、600人の受講生が参加しました。

本年度はこの講座をもとに、高校生を対象とした科学授業を行うこと、さらには放送講座をもとにした本を出版すること、放送講座のビデオを活用した13年度の総合講義を準備することなどが、決まりました。

12年度の放送講座の概要は次の通りです。

記

放送日時；平成12年11月5日～12月10日（全6回）

毎週日曜日深夜（月曜日）24時30分～25時0分
北海道放送（HBC）（30分番組）

講座テーマ；水の惑星とわたしたち 地球環境に
どんな異変がおきているのか（続）

第1回

「海は生きている 海の生き物による光合成と石灰化」

市川和彦（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

第2回

「森ができる 水を利用した光合成の進化」

田中 歩（北海道大学低温科学研究所教授）

第3回

「森は蘇る 森林の成り立ちと樹木の多様性」

原登志彦（北海道大学低温科学研究所教授）

第4回

「河は生きている 河川・森林間の資源のやりとり」

前川光司（北海道大学農学部附属演習林教授）

第5回

「湖は生きている 湖の生態系の成り立ちと物質循環」

岩熊敏夫（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

第6回

「水を浄める 自然環境と共生する札幌市水の再生構造」

渡邊義公（北海道大学大学院工学研究科教授）

エピローグ

丹保憲仁（北海道大学総長）

主任講師 市川和彦（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）

北海道大学放送講座に関する連絡先；

北海道大学高等教育機能開発総合センター

生涯学習計画研究部

担当教授 町井 輝久

電話・ファックス 011-706-5306/6069

Email tmachii@high.hokudai.ac.jp

センター日誌

CENTER EVENTS, Apr. - May.

4月

- 5日 ・ (行事) センター E 棟講義室及び基礎実験室内覧会
- 6日 ・ (行事) 新入生オリエンテーション
- 7日 ・ (行事) 入学式
- 10日 ・ (行事) 学部ガイダンス
- 11日 ・ 第 1 学期授業開始
- 12日 ・ (会議) 第 60 回全学教育委員会小委員会
- 24日 ・ (会議) 第 61 回全学教育委員会小委員会
- 25日 ・ (会議) 第 52 回センター教官会議
- 26日 ・ (行事) 情報教育館・放送大学北海道学習センター合築棟竣工記念式典

- ・ (会議) 第 30 回センター運営委員会
- 27日 ・ センターニュース第 29 号発行
- 28日 ・ (会議) 第 31 回全学教育委員会

5月

- 9日 ・ (会議) 第 62 回全学教育委員会小委員会
- 16日 ・ (会議) 第 63 回全学教育委員会小委員会
- 23日 ・ (会議) 第 64 回全学教育委員会小委員会
- 29日 ・ (会議) 第 31 回センター運営委員会
- 30日 ・ (会議) 第 53 回センター教官会議

行事予定

SCHEDULE, Jul. - Dec.

| | 【日(曜日)】 | 【行事】 | 【備考】 |
|-----|----------------|------------|------|
| 7月 | 21(金) | 第1学期授業終了 | |
| | 24(月) ~ 8月4(金) | 補講日 | |
| 8月 | 7(月) ~ 18(金) | 夏期休業日 | |
| | 21(月) ~ 9月1(金) | 定期試験 | |
| 9月 | 5(火) 正午 | 定期試験成績提出締切 | |
| | 5(火) ~ 8(金) | 追試験 | |
| | 8(金) 正午 | 追試験成績提出締切 | |
| | 中旬 ~ 下旬 | 学科等分属手続 | 当該学部 |
| 10月 | 2(月) | 第2学期授業開始 | |
| | 12(木) ~ 13(金) | 1年次履修届受付 | |
| | 13(金) | 追加認定試験成績締切 | |
| | 12(木) ~ 13(金) | 2年次以上履修届受付 | 当該学部 |
| 11月 | | | |
| 12月 | 25(月) ~ 1月5(金) | 冬季休業日 | |

編集後記

大学祭も終了した。大学祭といっても工学部から南はほとんどまつりの雰囲気もなかった。大学祭からテーマが消えて、屋台まつりやパブに化したのはもうかなり前からであるが、娯楽の場としての傾向は今年も一層強まったように思われる。学生たちには市民に語るべきものはもうなくなったのであろうか。語るには「自分」が不可欠だし、自分と他者とを結ぶ言葉が必要だ。とはいえ否定的なことばかりでもない。実行委員会の学生たちが大学祭の自主的運営に示した熱意は、参加した教職員に多くの感動を与えた。(街)

センターニュース 第30号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2000年6月27日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・植木迪子・鈴木誠

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center